別紙２

日本語研究推進事業　実践報告資料

［学校名：　加古川市立平岡東小学校］

【具体的な研究テーマ】
外国人児童の確かな学力向上とコミュニケーション能力の育成を図り自尊感情を高める

１　教科：単元名
４年生　理　科　「とじこめた水や空気」
４年生　音楽科　「指揮で自分の思いを表そう（メリーさんの羊）」
６年生　体育科　「抱え込み跳び」

２　実施日（時期）	３　実施場所
平成２８年１０月１８日（火）理科 平成２８年　７月１２日（火）音楽科 平成２８年１１月２９日（火）体育科	４年生教室【理科】 第２音楽室【音楽科】 体育館【体育科】

４　児童・生徒の実態に応じたねらい
(1) 児童の様子･･･学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など
【４年生　理科】
・インドネシア国籍Ｎ児　両親ともにインドネシア人で、日本語は話せるが、学校からの配布文書の詳しい内容は理解しづらい。本人は、日本生まれ日本育ちであり、日常生活における生活言語は習得できているため、会話で困ることはない。休み時間も元気に遊べており、友だちも多い。しかし、学習言語については、習得できていない言葉も多く、内容の意味理解に時間がかかる。授業中は真面目に取り組み、ノートはいつも丁寧に書くことができている。
・フィリピンルーツＦ児　父親が日本人で、母親がフィリピン人で、日本語での会話はできるが、文章を読んだり書いたりすることはできない。Ｆ児は、日本生まれ日本育ちなので、日常の生活言語は困ることなく話すことができている。休み時間には、友だちと元気に過ごし、授業中も積極的に手を挙げ、集中して話を聞くこともできる。しかし、テスト問題で聞かれている内容を理解できないことが多く、教科用語の習得が十分であるとは言えない。一生懸命に取り組む姿があり、友だちから認められることが多く、自尊感情が高まってきている。
【４年生　音楽科】
・インドネシア国籍Ｓ児　母親がインドネシア人。生活言語は備わっているが、自分の気持ちを言葉にしたり、伝えたりすることが苦手である。仲の良い友だちとはコミュニケーションをとることができる。音楽科では、リコーダーが得意で、歌も声は小さいが音はとることができる。自信があまり持てなくて控え目である。自分のイメージしたことを伝える指揮をする学習の際、イメージするものの写真や映像を見せたり、ワークシートに話型を書いたりする手立てをするとよくできるようになった。
【６年生　体育科】
・ペルー国籍Ｂ児　小学校入学時から５年時まで週１，２時間日本語指導教室にて取り出し指導を行っていた。５年時になると計算がかなり速く得意になり、算数科での取り出しは無くなったが、文章能力が思わしくなかったため、週に１回程度、日記や感想を書く指導を取り出しで行っていた。日本語能力も高く、教科の理解力もある。家庭では、母親の考えで母国語であるスペイン語も練習しており、会話はスペイン語で行われている。本人によるとスペイン語で考え、日本語に変換して学校生活を送っているようである。体育科においては、運動能力も高いが、すぐに課題を終わらせようとする多少雑な部分があるため、

振り返りの文章を書く場面では丁寧に指導していきたい。
・ペルー国籍N.D男児　小学校入学時から５年時まで週１，２時間日本語指導教室にて取り出し指導を行っていた。雨の日や月曜日など保護者の都合や本人の気持ちの問題で欠席が多い。年間６０日以上欠席した年もある。不登校傾向にあり、日頃から声掛けが必要な児童である。教科の理解力はあるが、欠席が続くため教科の積み重ねができていない。学習がどんどん遅れている状況である。算数の少人数担当や学級担任が関わって学習を教えているが、欠席が多いことが原因でなかなか解消されていない。体育科においては身体が大きいため、運動に対して苦手意識がある。器械運動は特に苦手である。自尊心がやや低くなっている。できることを増やして、やる気を持たせて取り組ませたい。

(2) 日本語指導にかかる目標
【４年生　理科】
・空気の「体積が小さくなる」様子を観察し、「おしちぢめられる」「体積が小さくなる」「おし返す力」の意味を理解することができる。（日本語の目標ア）
・「おしちぢめられる」「体積が小さくなる」「おし返す力」の用語を使って、空気の性質を説明することができる。（日本語の目標イ）
【４年生　音楽科】
・自分のイメージした羊を、指揮で表現することができる。（日本語の目標イ）
・「音楽のもと」・「感じを表す言葉」を使うことができる。（日本語の目標ウ）
「音楽のもと」・・・強弱、速度　　「感じを表す言葉」・・・指導案参照
【６年生　体育科】
・自分の身体の動きを大事な言葉（上達ワード）を使って言語化することができる。（イ・ウの目標）
「大事な言葉（上達ワード）」・・・両手の間に両足を入れる　　両足でふみきる　　腰を高くする　ひざをむねにひきつける　　目線は前にする　　両手を突き放す　　ひざを曲げて着地する

(3) 主な学習活動
【４年生　理科】
目に見えない空気の存在を理解させるために、体感、手ごたえ、可視化等の実感をともなう学習活動を進めていく。単元導入では、水槽の中でスポンジを握ったり、空気を閉じ込めた袋を触ったり、圧したりし、空気の存在や性質（弾性）を体感する活動を行う。第１次では、容器に閉じ込めた空気を圧し縮めたときの手ごたえや体積変化について調べるために、目盛りが付いており、体積変化のようすがわかりやすい注射器を用いる。注射器のピストンを圧した時の目盛りの数値や手ごたえに着目させ、空気の体積変化とおし返す力には、つながりがあることに気付かせたい。本時の学習である、空気の性質による体積変化では、「見えない」空気が本当に圧し縮められているのか、ということを理解しにくい児童の姿が予想される。そこで、空気を「見える」ようにするために、石鹸水の泡を使った実験を行う。泡の大きさの変化を空気の体積変化としてとらえさせ、空気が圧し縮められるようすを視覚的に理解させたい。
実験結果をまとめ、考察する際には、児童が実験の目的や調べる視点を明確にして学習にとりかかる手立てとして、ワークシートの構成や書かせ方を工夫する。力を加える前後の空気の体積変化に気付かせるために、注射器の目盛りを読み、数値化して書き込ませる。また、気付いたことを書かせる際には、空気を圧したときの手ごたえや、ピストンが押し戻されることに着目させる。その後、児童の気付きを整理し、「おしちぢめられる」「体積は小さくなる」「おし返す力」などの教科用語の習得へとつなげたい。結果からわかったことを話型にあてはめて、動作化しながら復唱させることで、空気の性質を説明するための手立てとする。また、言葉で表現することが苦手な児童へは、大切な言葉を黒板に整理して示し個別の支援としたい。
【４年生　音楽科】

「トルコ行進曲」で行進をしたり指揮を振ったりしながら、身体全体で２拍子の拍の流れを感じさせる。また、だんだん遠ざかっていくようすを指揮で表現させ、「様子」と「指揮」を結びつけられるようにする。次に「メリーさんの羊」で自分の想像した羊を言葉に表し、指揮で表現できるようにする。その際、羊の大きさや行動、気持ちなどの感じを表す言葉の例を出したり「音楽のもと」を示したりして児童の語彙の獲得量を増やす。さらに「〇〇をイメージして△△な指揮をします」などの話型に当てはめさせて児童が表現しやすいように支援する。また、強弱や速度のバリエーションを提示し当てはめることで、様子から指揮を考えることが苦手な児童も、自分のイメージに合う強弱や速度を選ぶことができるようにしていきたい。指揮で表現する際にはグループ活動を取り入れ、自分のイメージした羊を伝える指揮を工夫し、児童同士での学び合いを大切にしながら表現活動を深めていきたい。

【６年生　体育科】

児童が跳び箱運動に楽しく技術を高めていけるように、恐怖心を取り除くことができるような場づくりを設定することが必要である。特にかかえ込み跳びは、ひざを胸に引きつけて跳ぶため、跳び箱の角で膝や脛を打つのではないかという恐怖心が開脚跳びよりも増すものと考えられる。セーフティーマットを使用して安全に配慮し、児童が「これならできるかもしれない」という自信や勇気が湧いてくる場づくりを設定したい。そして、難易度を少しずつ上げたスモールステップの場を作り、児童が個々の能力に合った練習方法を選び、単元の中でできることが少しでも増えていくような学習を展開していく。マット運動は児童同士の補助でも安全に技を習得することができるが、跳び箱運動では、教師の補助ではないと安全確保が難しい。今回は、６年生ということもあり女子児童に配慮し、T1T2 方式をとり、学級担任に女子児童の補助を依頼した。また自分の動きは感覚でしか分からないため、見ている児童がお互いにアドバイスをし合い、失敗を笑わずに助け合って学習を進めていけるように約束を守ることも大切にしたい。

５　評価の観点

【４年生　理科】

・閉じ込めた空気や水に力を加えたときの現象に興味・関心をもち、進んでその体積や圧し返す力の変化を調べようとする。（関心・意欲・態度）
・閉じ込めた空気や水の体積や圧し返す力の変化によって起こる現象とそれぞれの性質を関連付けて考えることができる。（思考・表現）
・閉じ込めた空気や水に力を加えたときの変化を比較して、それらの違いをとらえることができる。（思考・表現）
・容器を使って空気や水の変化を調べる実験をすることができる。（技能）
・空気や水による現象の変化を調べ、その過程や結果を記録することができる。（技能）
・閉じ込めた空気を圧すと、体積は小さくなるが圧し返す力は大きくなることを理解している。（知識・理解）
・閉じ込めた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないことを理解している。（知識・理解）

【４年生　音楽科】

・指揮の学習にすすんで取り組もうとしている。（音楽への関心・意欲・態度）
・自分のイメージしたことが伝わるように指揮のしかたを工夫している。（音楽表現の創意工夫）
・自分の思いや意図を「音楽のもと」を使って説明し、指揮で表現する。（音楽表現の技能）
・行進曲のリズムや２拍子の流れを感じ取って聴く。（鑑賞の能力）

【６年生　体育科】

・技ができたり、高めたりする楽しさや喜びに触れ、約束を守り、助け合って運動しようとしたり、運動する場や器械・器具の安全に気を配ろうとしたりしている。（関心・意欲・態度）
・課題解決の仕方を知り、自分の課題に合った練習の場や方法を選んでいる。自分が取り組む技のポイントを知り、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。（思考・判断）

・自分の力に合った安定した基本的な切り返し系の技や回転系の技ができる。自分の力に合った切り返し系や回転系の発展技ができる。（技能）

６　指導内容の概要（※指導案別途添付）

【４年生　理科】

・閉じ込めた空気を圧したとき、体積は小さくなることと、圧し返す力が大きくなることを理解し、「おしちぢめられる」「体積が小さくなる」「おし返す力」の用語を使って、空気の性質を説明することができる。

【４年生　音楽科】

・自分のイメージした羊を指揮で表し、「音楽のもと」や「感じを表す言葉」を使って、感想を書くことができる。

【６年生　体育科】

・安定したかかえ込み跳びができ、その課題解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の方法や場を選ぶことができる。

７　指導内容・方法において工夫したところ

【４年生　理科】

・目に見えない空気の存在を理解させるために、体感、手ごたえ、可視化等の実感をともなう学習活動を工夫した。

・水槽の中でスポンジを握ったり、空気を閉じ込めた袋を触ったり、圧したりし、空気の存在や性質（弾性）を体感する活動をさせるようにした。

・実験結果をまとめたり、考察したりする際には、児童が実験の目的や調べる視点を明確にして学習にとりかかる手立てとして、ワークシートの構成や書かせ方を工夫した。

【４年生　音楽科】

・児童の実態把握を行い、羊を知っているかどうかのアンケートを取った。羊のイメージを明確にできるように映像や写真を視聴させ、イメージを膨らませやすいよう工夫した。

・話型に当てはめて児童が表現しやすいようなワークシートを工夫した。

【６年生　体育科】

・恐怖心を取り除くことができるようにセーフティーマットを使った場づくりや難易度を少しずつ上げたスモールステップの場を工夫した。

・技を高めるポイントをより意識できるように、自分の身体の動きを表していけるようなワークシート作成を工夫した。

・踏み切り、着手、着地のポイントに児童を立たせて、友だち同士で声をかけ合う活動を工夫した。

８　教材・教具

【４年生　理科】

・目に見えない空気をつぶで表した掲示

・実験器具（ピストン、石鹸水）

【４年生　音楽科】

・「音楽のもと」や「感じを表す言葉」を書いた掲示

・羊の写真、映像動画

【６年生　体育科】

・上手な児童の跳び方をスローモーションで編集したビデオ

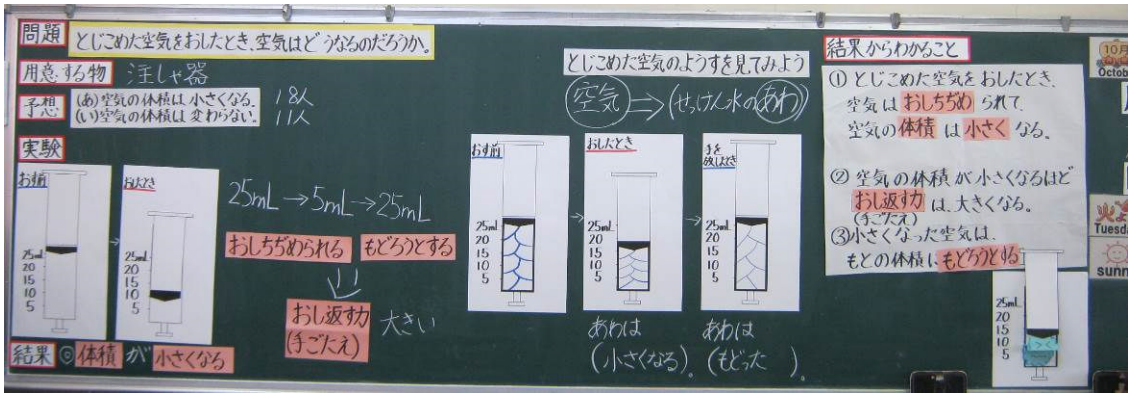
・上達ポイントが分かりやすい大事な言葉を示した掲示

・上達ワードを使って自分の動きを表現するワークシート

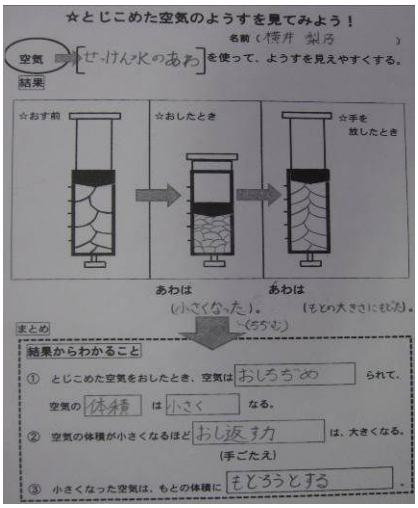
・跳び箱・マット・マットのすべり止め・ロイター板・セーフティーマット

９　活動の様子（写真等）

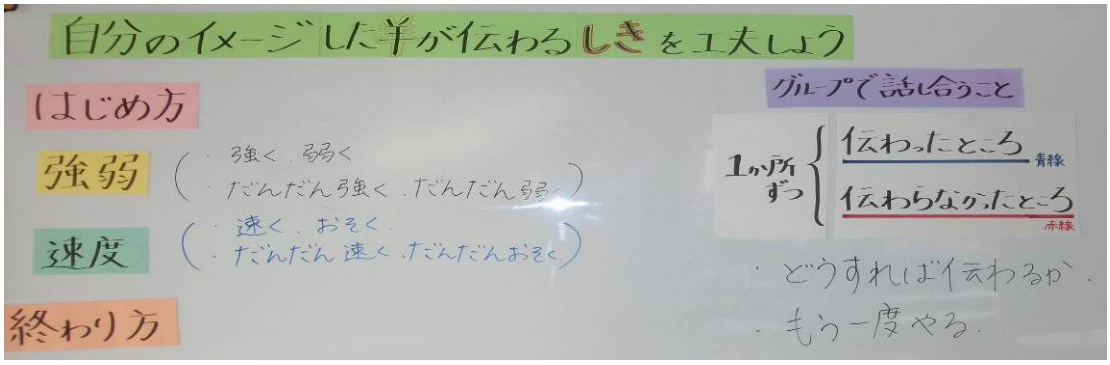
日本語の目標を達成するための支援である、理解支援、表現支援、記憶支援を以下に示す。すべての児童が理解できるように、板書を工夫したり、ワークシートを工夫したりした。また、意見の交流ができるよう、話し合い活動を授業の中に取り入れた。



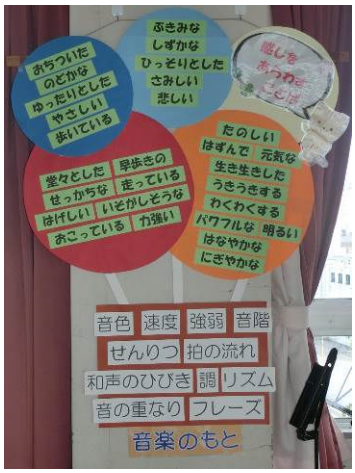
【理科】目に見えない空気の様子を視覚的に分かるような支援を板書に取り入れた（理解支援・表現支援）

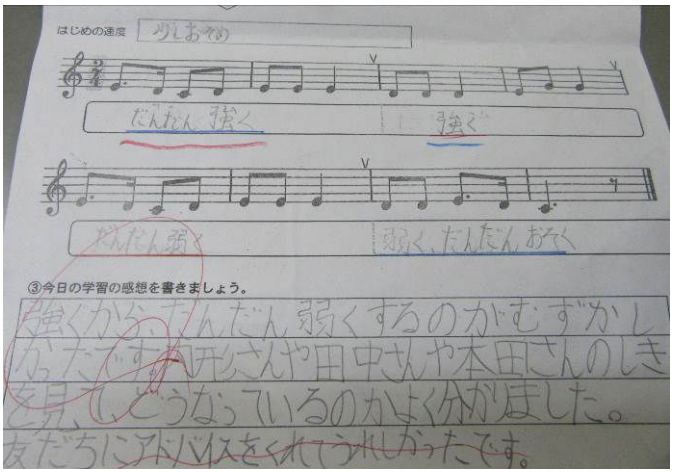


【理科】教師の演示実験で視覚的に理解させる（理解支援）
【理科】教科語彙を習得しやすいように話型を示したワークシートの工夫（理解支援）

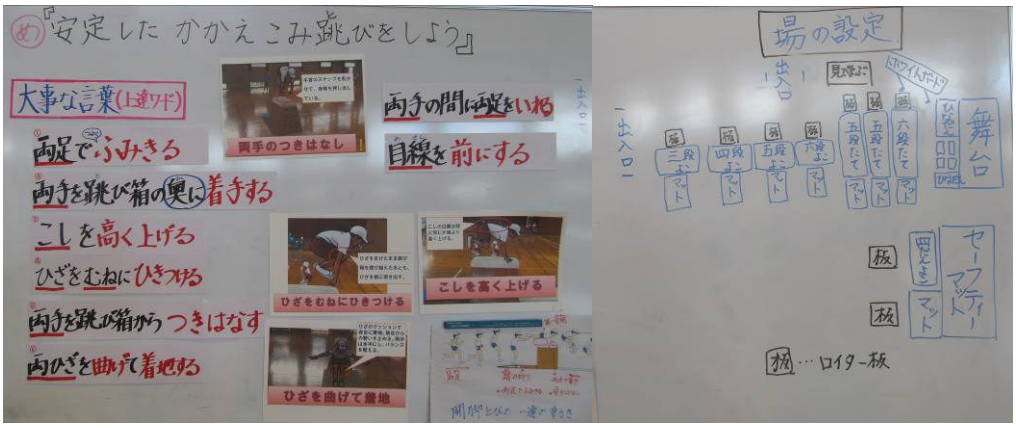


【音楽科】授業後のホワイトボードと指揮で表現する方法を話し合っている様子（記憶支援・表現支援）





【音楽科】児童が「音楽のもと」や「感じを表す言葉」を音楽で使う用語として獲得しやすいように工夫した掲示（理解支援・記憶支援）
【音楽科】感想を「音楽のもと」や「感じを表す言葉」を使って書けるようにしたワークシート（表現支援・理解支援）



【体育科】上達ポイントが分かりやすい大事な言葉を示した掲示（理解支援・表現支援）

【体育科】上手な児童の演技を撮影し、映像を流して、全体で確認している様子（理解支援）
【体育科】恐怖心を無くすような安全に配慮した場づくりで練習する様子（表現支援）

10　児童・生徒の感想等

【理科】

・ピストンを押したときはとても固かった。ゴムを押すとメモリが５ml まで押せた。手を放すとピストンが上に戻った。押し返す力が強いことが、実験から分かった。

・ピストンを押したとき、空気の体積は小さくなった。その時は押し返す力が強かった。空気の体積は押し縮められることが分かった。

【音楽科】

・感じを表す言葉が書いてあったので、羊のイメージが出しやすく、どんな感想を言えばよいかが分かった。

・指揮を前でするのは恥ずかしかったけど、自分がイメージする羊を表現できたと思う。

【体育科】

・上達ワードを覚えると、友だちにどのようにアドバイスをしていったらよいかが分かる。

・上達ワードを意識すると自分の力に合った動きができるようになった。

・今までなぜできるのか分からなかったが、上達ワードを使って自分の身体の動きを説明していると、自分ができる理由が分かった。

11　児童の実態把握について

【理科】

本学級には、外国籍の両親を持つ児童が２名在籍する。日本での生活経験は長いので日常生活においては、困ることなく過ごしている。しかし、日常的に使わない言葉については、理解が難しい様子が見られる。特に理科の学習においては、内容の意味理解に時間を要し、確実な内容の定着が図れていない。

空気や水の性質を学習するにあたり、児童の実態を調査すると、以下のような結果となった。

空気鉄砲を知っているか	知っている　・・・８７％	知らない　・・・１３％
空気鉄砲で遊んだことがあるか	遊んだことがある　・・・４２％	遊んだことがない　・・・５８％
空気を閉じ込めることができるものを挙げよ（複数回答可）	多数意見 風船・袋・ボール・浮き輪口・段ボール・ペットボトル・タイヤ・空気入れ	少数意見 スポンジ・地球・宇宙服・肺冷蔵庫・シャボン玉・箱ポット

アンケート結果により、空気鉄砲の存在は知っているが、実際に遊んだ経験のある児童が半数以下であることがわかった。また、「身の回りにある空気を閉じ込めるもの」については、身の回りにある風船、袋、ボールなどが挙げられたが、目に見えない空気の存在を意識して過ごしていない児童が多く、「空気を閉じ込める」という意味の理解が難しいと考えられる児童もいた。

【体育科】

１学期に行ったマット運動では、倒立前転、前方倒立回転など倒立系や回転系の発展技を補助なしで成功させ、ミニ先生になって友だちにアドバイスができる児童もいた。しかし、倒立系の運動において、自分の体重を両手で支持できにくい児童も３人おり、すべての児童が安定した壁倒立や補助倒立ができるに至っていない。両手で身体を支えきれないため、斜めに回ってしまう前転をする児童、後転運動では、両手を突き放して回ることができない児童が少数いた。跳び箱運動については、以前から準備運動で馬跳びやカエル跳び、カエルの足うちなどをさせていたため、馬跳びができない児童はいない。つまり基本的な支持跳び越しはできている。しかし、カエル跳びについては、抱え込み跳び運動を成功させるために必要になってくる運動であるが、両手を開いて着手した場所に両足をつく運動ができていない児童が３人いた。両手を着かずに前のめりになってしまったり、両手を突き放せずに両足を両手の方へもっていくことができなかったりしていた。まずは、マットの奥に着手して跳び越す運動【写真１】を行い、その後セーフティーマットと同じ高さに重ねたマットを跳び越す運動【写真２】に続けて、スモールステップでかかえ込み跳び運動に移行できるような手

立てが必要であった。

【写真１】　　【写真２】

この２つの運動を行ってもマットの幅を跳び越すには至らない児童が数名いる。跳び越すためには、両手の突き放しがポイントとなってくる。単元計画第１時で行った跳び箱運動の「開脚跳び」でも、跳び箱を跳び越す際に、両手の突き放しという技能ポイントがある。以下は開脚跳び５段、６段のチェックである。

事前の開脚跳びチェック		
第６学年２組	成功者	成功率
５段開脚跳び	３９人中３３人成功	８４．６％
６段開脚跳び	３９人中３２人成功	８２．１％

開脚跳びでは、腕支持からの体重移動が不可欠である。また安定した開脚跳びをするためには、跳び越す際の両手の突き放しが大切である。成功していない児童のほとんどが腕支持の体重移動や自分の体重を手や腕で支えることができていなかった。開脚跳びとかかえ込み跳びの２つの運動で両手の突き放しを指導し、多くの児童が技能を習得できるようにしていきたい。

言葉にこだわった授業づくりをするためには、児童の実態把握が必要であった。例えば、５年生社会科「あたたかい地方」では、あたたかい地方特有の「家のつくり」から考えていく授業がある。そこでは、石垣や防風林、貯水タンクなど必ず理解しなければならない教科用語が出てくる。学習参加には不可欠である。しかし、児童は「つくり」の意味を知っているのだろうか。単元開始前に児童に質問紙を配ったところ、「家のつくり」をきちんと理解していた児童は４０人中３人であった。

このように、知っているだろうと思って授業を展開していると実は学習しているようで、児童には何を学習しているのか分からない可能性もある。また、４年生音楽科「指揮で自分の思いを表そう（メリーさんの羊）」での事前の実態把握では、羊を知らない児童が２割もいた。知っていると答えた中にも、アルパカと羊を混同している児童やヤギと間違えていた児童も多かった。そのため、羊とはどんな動物であるかを写真や動画を児童に視聴させて授業に入った。

つまり、自分のクラスの児童が、何ができて、どんな学習が未定着なのかを把握した上での授業づくりを心がけることで、すべての児童が授業に参加でき、生き生きと活動できるユニバーサルデザイン的な授業に近づくことができる。実際、実態把握をした上で単元に入ると児童の理解度が向上していく感覚はどの教師も持っていたようであった。

12　実践をとおしての成果

教科指導型日本語指導の推進３年目であるが、研究授業を行った教師からも成果の声が届いてきている。ブラジル人児童Ａは、文化の違いもあってか、近隣でのトラブルやクラスの友人との諍いも多く、ほぼ毎日のようにクラスメイトと言い争いになり手が出てしまっていた。

しかし、教科指導型日本語指導ですすめた算数科「面積」の学習時、立式方法を話型にあてはめて説明する学習を繰り返すうちに、順序立てて相手に伝える力が身についてきた。このことが学校生活にも生かされ、揉め事があっても上手く自分の気持ちを相手に伝えられるようになり、イライラして手が出ることも減り、３学期にはトラブルが全く無くなった。

また、教科指導型日本語指導の指導案には、外国人児童の実態を載せることで、日本語理解が不十分な外国人児童が分かるような授業づくりの視点を表している。児童の生活状況を考えた実態把握をする教師も増えてきて、「この言葉は本当にみんなが分かっているのか」という児童に寄り添ったユニバーサルデザインの視点で授業を組み立てられるようになってきた。教科指導型日本語指導を取り入れた授業研究も、市内の公開授業を合わせて１２回行うとともに、校内でも一人一授業を行っており、多くの教師が教科指導型日本語指導を実践することができている。

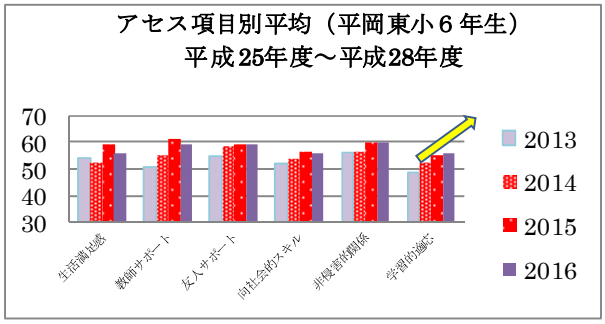
一方、児童の学習的適応感という視点で見てみる。加古川市は、２０１３年度から『学校環境適応感尺度（アセス）』のアンケートを導入している。このアンケートでは、生活満足感・教師サポート・友人サポート・向社会的スキル・非侵害的関係・学習的適応の６項目について、個人表に偏差値で表した数値とレーダーチャートが表示される。

学習的適応因子
勉強のやり方がよくわからない　　勉強の問題が難しいとすぐにあきらめてしまう
授業がよくわからないことが多い　　勉強について行けないのではないかと不安になる
自分は、勉強はまあまあできると思う

このような質問内容が学習的適応因子にはある。次に示したのは、２０１３年度から２０１６年度、過去４年間の本校６年生児童の平均値の表とグラフである。

過去4年間　6年生平均

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的関係	学習的適応
2013	54.2	51	55	52	56	49
2014	52.5	55.25	58.5	53.75	56.5	52
2015	59	61	59	56	60	55
2016	56	59	59	56	60.3	56

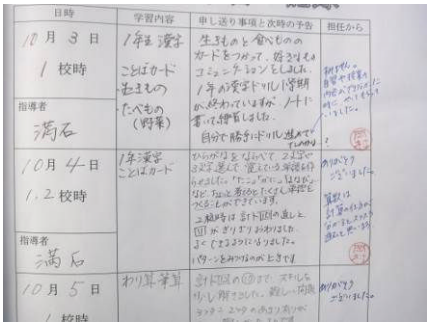


学習的適応に注目してみると、２０１３年度と比べ、児童自身が学習できていると感じている数値（学習的適応）が年々かなり向上していることが分かる。他の因子も連動して向上が見られる。教科指導型日本語指導の取り組みは、２０１４年度より開始しており、その効果が表れていることが一目瞭然である。教師が児童の実態に寄り添ったユニバーサルデザイン的な授業づくりを行っていることが、児童の適応感からも分かる。

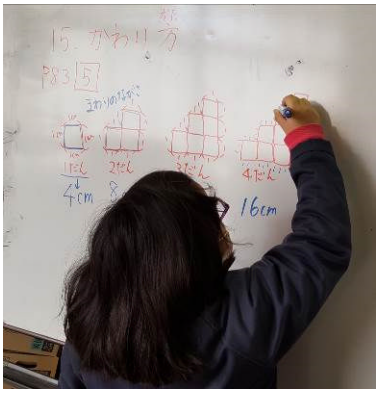
外国人児童・保護者が持っている人権課題

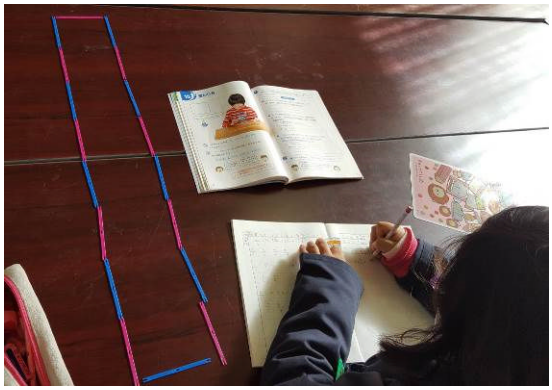
外国人児童の中には、来日したばかりの児童や在日期間の短い児童がいる。今年度２学期から来日１ヶ月のペルー国籍Ｂが転入して来た。学習面はほぼ取り出し指導で、ひらがな、カタカナ、漢字、計算を１年生の内容から学ばせているところである。多文化共生サポーターがつく場合は、細かい言い回しを訳してもらい、児童の理解を促すことができるが、サポーターも最大、週に２，３回つくという状況である。難しいこともあるが、日本語指導教室にて取り出し指導を行い、日本語指導担当教諭が個別指導や複数指導を行っている。しかしながら、多文化共生サポーターとの連携もあり、Ｂは、スポンジのように学習内容を吸収して、日々、コミュニケーション能力も向上してきている。

【絵カードで日本語を教えている様子】



【学級担任との連絡表】





【自分から進んで答えを書き込みにくる様子】　【具体物を操作して学習している様子】

２年前には来日直後の中国人児童Ｃが入学して来た。この児童も、日本語指導担当教諭や児童生徒支援担当教諭が取り出し指導を１年間行い、２年生時には、通常学級で学習できるまでの成長を見せた。残念ながら３年生になる直前に家庭の都合で転出してしまったが、本人は転出を望まず、当時の児童生徒支援担当教諭に泣きついていた姿が忘れられない。一から日本語を教えてくれた教諭に対しての感謝の思いがあったのだろう。外国人児童の急な転出はＣだけでなく、よくあることである。経済的な事情が外国人児童の生活や学習に対して、大きく影響を及ぼすこともある。（上記の２名は特別の教育課程編成）

外国人児童支援で非常に役立つ存在がある。まずは、多文化共生サポーターである。この３年間でスペイン語、中国語、ポルトガル語と３人のサポーターが入り、該当児童と保護者に関わってくれた。授業中は入り込みによる個別指導での学習支援や重要な保護者宛の文書の翻訳、さらに、生活指導面での保護者への連絡等にも積極的で、児童保護者の困り感はかなり軽減されている。指導に当たる職員にとっても効果的である。中国語のサポーターの方は、校内研修で外国人児童の保護者の困り感の講話や、文化交流として、料理実習も夏季研修で行ったりした。

次に国際交流ボランティアの方々である。数人在籍している中国人児童に対し、放課後に宿題を見てくれたり、間違いやすい日本語の言い回しについて授業してくれた。

さらに、地域の中には、日本語教室のボランティア団体があり、本校では、２人が近隣にある日本語教室に毎週水曜日通っている。対象児童を担任した教職員が参観し、学習会に参加することもあった。関係機関の協力を得た連携で、課題を解決できることもあった。

しかし、このような支援機関を積極的に利用できる外国人児童保護者がすべてではないという点でもさらに課題は大きい。地域や同級生の保護者と距離を置き、孤立してしまっている外国人家庭もある。月曜日や家族の誕生日、雨の日などは必ず欠席するブラジル人児童Ｄ。不登校担当教諭や児童生徒支援教諭が迎えに行くが、なかなか改善が見られない。また、過去にブラジル人児童Ｅは、卒業時、中学校入学を拒否したこともあった。外国籍の児童生徒は義務教育制度が適応されないため、本人や保護者の意思が尊重されるということだった。学級担任や日本語指導担当教諭が家庭訪問し、何とか入学したが、これも難しい課題となった。中学校入学時ガイダンスの充実も前もって行う必要性を感じさせられた。

文化や宗教上の違いがあるが、折り合いを付けつつ、少しずつ課題を解決につなげていかなければならないと感じることが多い。外国人児童にとっては、誰も知らない異国の地で生活しなければならないというストレスがある。保護者もそうである。様々な問題を抱え通ってきている外国人児童に対する支援は、大きな人権課題である。

本年度の研究経過を以下に示す。

月	内　　容
４月	・日本語指導研究推進委員会の設置（研究推進） ・日本語指導が必要な児童の把握と情報共有
５月	・校内日本語指導推進委員会（推進体制・計画等の詳細決定） （教科指導型日本語指導を取り入れた授業研究）
６月	・第１回日本語指導推進校連絡会【6/14】神戸市立春日野小学校 ・第１回校内全校授業研究（５年生社会科）・事後研修会（臼井智美准教授）【6/29】
７月	・加古川市音楽担当者授業研究（４年生音楽）【7/12】 ・校内日本語指導推進委員会（１学期推進の反省）
８月	・日本語指導研修会（臼井智美准教授）『教科指導型日本語指導について』【8/25】
９月	・校内日本語指導推進委員会（２学期の指導体制確認） ・校内部会授業研究（６年生算数科）【9/26】 ・校内部会授業研究（３年生算数科）【9/28】
１０月	・第２回校内全校授業研究（４年生理科）・事後研修会（臼井智美准教授）【10/18】 ・平成２８年度芦屋市学力向上支援プラン指定授業研究発表会　芦屋市立潮見小学校　事後研究会（大阪教育大学臼井智美准教授）【10/19】 ・校内部会授業研究（２年生国語科）【10/19】 ・第２回日本語指導推進校連絡会【10/25】篠山市立岡野小学校
１１月	・第３回校内全校授業研究（１年生国語科）（６年生体育科） 事後研修会（臼井智美准教授）【11/29】
１２月	・校内日本語指導推進委員会（来年度に向けた話し合い）
１月	・第３回日本語指導推進校連絡会【1/23】姫路市立花田中学校 ・校内日本語指導推進委員会（来年度に向けての課題確認）
２月	・校内日本語指導推進委員会（日本語指導実践報告資料検討）
３月	・校内日本語指導推進委員会（今年度のまとめ　事業報告書検討・作成）

13　今後の課題

教科指導型日本語指導推進３年目が終わる。昨年度は算数科と理科に教科を絞って研究をしたが、今年度は教科の幅を広げ、社会科、国語科と、すべて教科においてこの指導で授業づくりができるように職員一同、研鑽の日々を送っている。また、専科部会では、音楽科、体育科、図工科と技能教科でも行えるように研究をすすめている。年間４回講師の臼井准教授を招聘し、学びの場を設定している。

しかし、年度末になれば、約３分の１の教職員が入れ替わり、指導法の伝達が校内研修等で必要不可欠となっている。ベテラン教職員が少ない割に若手教職員が多く、学年によっては平均年齢３０歳を切るところもある。このような課題も抱えつつ、平岡東小学校の強みである組織力を生かし、研究を進めている。現在、来年度の研究等を学年等で話し合っており、２月初旬には方向性が決定する。

また、外国人児童とその保護者には、先に述べた生活状況や実態がある。すべての児童が共に学べる、教科指導型日本語指導をすすめていくためには、外国人児童、保護者を取り巻く様々な問題解決が不可欠である。生活背景を知り、困り感を聴き、寄り添った指導を行うことでお互いの信頼関係が生まれる。そうすることで、本当の意味での国際連帯、多文化共生教育がすすめられると考えられる。

さらに、外国人児童は中学校へ進学してからも学習面で困難な場面が多くなる傾向がある。小中連絡会等でたびたび議題に上がってくるが、小学校で研究している教科指導型日本語指導を小中連携で行っていく必要性も感じられる。生活指導面の連携はできているが、中学校進学後の学習状況については情報がなかなか入ってこない。学習の系統性を研究し、国語を研究にしたいという声もあるので、中学校との学習系統性まで研究していくことができれば、研究連携も深まるのではないかと思われる。

日本語指導とは人権課題であると臼井准教授も述べている。前述した課題を地道に解決し、研究推進委員会や研修担当がスクラムを組み、教職員間の技術、指導法の伝達を密におこない、校長、教頭のリーダーシップのもと、何を学ばせるのかだけではなく、どのように学ばせるのか、何のために学ばせるのかという意識を教職員全員がもち、授業づくりに努め、外国人児童を含めた未来あるすべての児童の健やかな成長へと研究を還元していきたい。

第４学年３組　　理科学習指導案

２０１６年１０月１８日（火）　５校時

１．単元名　　とじこめた空気や水

２．単元目標

○閉じ込めた空気や水に力を加えたときの現象に興味・関心をもち、進んでその体積や圧し返す力の変化を調べようとする。（自然事象への関心・意欲・態度）

○閉じ込めた空気や水の体積や圧し返す力の変化によって起こる現象とそれぞれの性質を考察し、自分の考えを表現し、空気と水の性質について調べたことを、絵や文でまとめ、表現することができる。（科学的な思考・判断）

○閉じ込めたときの空気や水を圧したときの体積変化や、元に戻ろうとする働きについて、注射器を使って調べ記録することができる。（観察・実験の技能）

○閉じ込められた空気は、体積は小さくなるが、押し返す力は大きくなることを理解できる。また、閉じ込められた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないことを理解することができる。（自然事象についての知識・理解）

３．評価規準

観点別学習状況の評価規準			
関心・意欲・態度	思考・表現	技能	知識・理解
・閉じ込めた空気や水に力を加えたときの現象に興味・関心をもち、進んでその体積や圧し返す力の変化を調べようとする。	・閉じ込めた空気や水の体積や圧し返す力の変化によって起こる現象とそれぞれの性質を関連付けて考えることができる。 ・閉じ込めた空気や水に力を加えたときの変化を比較して、それらの違いをとらえることができる。	・容器を使って空気や水の変化を調べる実験をすることができる。 ・空気や水による現象の変化を調べ、その過程や結果を記録することができる。	・閉じ込めた空気を圧すと、体積は小さくなるが圧し返す力は大きくなることを理解している。 ・閉じ込めた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないことを理解している。

４．指導にあたって

本学級の児童は、理科の学習が好きな児童が多く、興味をもって実験や観察に取り組んでいる。「電気のはたらき」の学習では、モーターカー作りを通して、乾電池のつなぎ方とモーターの回り方の関連を調べ、意欲的に実験に取り組むことができた。実験の際には、結果を記録することや比較して調べることなどについて経験を重ねている。理科学習に興味・関心の高い児童は、結果を予想したり考えたりする際に、視点や比較するポイントについて明確にした上で、生活経験をもとに自分の言葉で発言することができた。しかし、学級全体では、積極的に発言する児童に偏りがあり、自分で考えたり、考えたことを表現したりすることが苦手な児童が多い。感覚的に予想を立て、実験の目的や視点が定まらないまま取り組む児童が多く、実験結果と学習課題を結びつけて考えたり、用語を用いて「なぜそうなるのか」ということを説明したりできる児童は少ない。また、観察や結果からわかったことやその理由を、自分の身の回りにあるものと関連付けて説明したり、考察に結び付けたりできる児童は少ない。

本学級には、外国籍の両親を持つ児童が２名在籍する。日本での生活経験は長いので日常生活においては、困ることなく過ごしている。しかし、日常的に使わない言葉については、理解が難しい

様子が見られる。特に理科の学習においては、内容の意味理解に時間を要し、確実な内容の定着が図れていない。

空気や水の性質を学習するにあたり、児童の実態を調査すると、以下のような結果となった。

空気鉄砲を知っているか	知っている　・・・８７％	知らない　・・・１３％
空気鉄砲で遊んだことがあるか	遊んだことがある　・・・４２％	遊んだことがない　・・・５８％
空気を閉じ込めることができるものを挙げよ（複数回答可）	多数意見 風船・袋・ボール・浮き輪ロ・段ボール・ペットボトルタイヤ・空気入れ	少数意見 スポンジ・地球・宇宙服・肺冷蔵庫・シャボン玉・箱ポット

アンケート結果により、空気鉄砲の存在は知っているが、実際に遊んだ経験のある児童が半数以下であることがわかった。また、「身の回りにある空気を閉じ込めるもの」については、身の回りにある風船、袋、ボールなどが挙げられたが、目に見えない空気の存在を意識して過ごしていない児童が多く、「空気を閉じ込める」という意味の理解が難しいと考えられる児童もいた。

本単元では、学習指導要領、第４学年２内容Ａ物質・エネルギー（１）「空気と水の性質」に示された指導事項のために設定されている。本内容は、「粒子」についての基本的な見方や概念を柱とした内容のうちの「粒子の存在」にかかわるものである。ここでは、空気及び水の体積の変化や圧し返す力の変化を調べ、空気及び水の性質についての見方や考え方をもつことができるようにすることをねらいとしている。この学習は、６年生の「燃焼の仕組み」、中学１年生の「物質のすがた」、中学２年生の「物質の成り立ち」、中学３年生の「水溶液とイオン」、高校理科の「物質の構成粒子」の学習へと発展していく。

そこで指導にあたっては、わかりやすい指導を目指すために、以下の点について指導していく。目に見えない空気の存在を理解させるために、体感、手ごたえ、可視化等の実感をともなう学習活動を進めていく。単元導入では、水槽の中でスポンジを握ったり、空気を閉じ込めた袋を触ったり、圧したりし、空気の存在や性質（弾性）を体感する活動を行う。第１次では、容器に閉じ込めた空気を圧し縮めたときの手ごたえや体積変化について調べるために、目盛りが付いており、体積変化のようすがわかりやすい注射器を用いる。注射器のピストンを圧した時の目盛りの数値や手ごたえに着目させ、空気の体積変化とおし返す力には、つながりがあることに気付かせたい。本時の学習である、空気の性質による体積変化では、「見えない」空気が本当に圧し縮められているのか、ということを理解しにくい児童の姿が予想される。そこで、空気を「見える」ようにするために、石鹸水の泡を使った実験を行う。泡の大きさの変化を空気の体積変化としてとらえさせ、空気が圧し縮められるようすを視覚的に理解させたい。

実験結果をまとめたり、考察したりする際には、児童が実験の目的や調べる視点を明確にして学習にとりかかる手立てとして、ワークシートの構成や書かせ方を工夫する。力を加える前後の空気の体積変化に気付かせるために、注射器の目盛りを読み、数値化して書き込ませる。また、気付いたことを書かせる際には、空気を圧したときの手ごたえや、ピストンがおしもどされることに着目させる。その後、児童の気付きを整理し、「おしちぢめられる」「体積は小さくなる」「おし返す力」などの教科用語の習得へとつなげたい。結果からわかったことを話型にあてはめて、動作化しながら復唱させることで、空気の性質を説明するための手立てとする。また、言葉で表現することが苦手な児童へは、大切な言葉を黒板に整理して示し個別の支援としたい。

本単元の学習を通して、課題解決に向けて、記録したことや既習の言葉を使い、能動的に取り組める姿を目指したい。

５．単元の指導計画・評価計画(全７時間)

次	時	児童の学習内容・活動	指導上の留意点	大切な言葉　おもな評価規準
単元導入	1	・空気を閉じ込めた容器を使って、空気の存在や性質を体感する。	・目に見えない空気の存在の不思議さに興味・関心をもてるように身近なものを掲示する。	関空気を閉じ込めた袋を使って、空気の存在や性質を体感しようとしている。 **とじこめる**
第1次	2	・空気を圧したときの体積の変化や手ごたえの予想を立てる。	・目に見えない空気をモデル化して予想させ、図や絵で表すようにする。	思閉じ込めた空気を圧したとき、体積がどうなるかを予想し、それを調べる方法について、自分の考えを表現している。**体積**
	3（本時）	・空気を圧すとどうなるかを調べ、結果をワークシートにまとめる。	・空気の性質として、体積の変化ともとに戻ろうとする力の大きさの関係をまとめさせる。	知閉じ込めた空気を圧したとき、体積は小さくなることと、圧し返す力が大きくなることを理解する。 **おしちぢめられる　　おし返す力** **体積は小さくなる**
第2次	4	・水を圧したときの体積の変化や手ごたえの予想を立てる。	・身の回りの水の入ったものを想起させて、水を圧したときのようすを予想させる。	思閉じ込めた水を圧し縮めることができるかについて空気の場合と比較して考察し、自分の考えを表現している。
	5	・水を圧すとどうなるかを調べ、結果をワークシートにまとめる。	・空気と水を押したときの体積の違いを比較させる。	技閉じ込めた水を圧したとき、体積がどうなるかを調べ、記録している。 知閉じ込めた水は、空気と違って、圧し縮められないことを理解している。**体積は変わらない** **おしちぢめられない**
第3次	6	・空気と水を両方入れた場合を調べる。 ・空気鉄砲で玉を飛ばす。	・空気の体積は小さくなるが、水の体積は変わらないことを確かめさせる。 ・空気鉄砲の玉の位置や詰め方、圧し方と玉の飛び方の違いについて学習した内容と関連付けて考えさせる。	知閉じ込めた空気は圧し縮められるが、水は圧し縮められないことを理解している。 関閉じ込めた空気を利用したおもちゃ(空気鉄砲)を使い、飛距離が伸びるしくみについて意欲的に取り組もうとしている。
	7	・単元のまとめをする。	・既習の内容を振り返り、活用問題に取り組ませ、理解が十分でない児童には個別指導をする。	

６．本時の目標（第１次　第３時）

・閉じ込めた空気を圧したとき、体積は小さくなることと、圧し返す力が大きくなることを理解する。（知識・理解）

７．日本語の目標

・空気の「体積が小さくなる」様子を観察し、「おしちぢめられる」「体積が小さくなる」「おし返す力」の意味を理解することができる。

・「おしちぢめられる」「体積が小さくなる」「おし返す力」の用語を使って、空気の性質を説明することができる。

ターゲットセンテンス

・注射器の目盛りは何 mL になりましたか。

・空気を圧したときの手ごたえはどうでしたか。

８．本時の展開

学習活動	教師の支援	大切な言葉･評価規準
１．学習課題を確認し、予想する。	・予想し、自分の立場を明確にすることで、実験への意欲を高めさせる。（情）	
とじこめた空気をおしたとき、空気はどうなるのだろうか。		
２．実験する。 ・注しゃ器をおすと、空気の体積に変化がある。	・水槽の水を使い、注射器に空気をとじこめるようすを、視覚的に理解させる。（理） ・空気の体積変化がわかるようにするため、注射器の目盛りの数値を記録させる。（理） ・空気の圧し返す力に気付かせるため、圧した時の手ごたえに着目させる（理）	**とじこめた空気** **体積** 関実験に意欲的に取り組もうとしている。
３．結果を図や言葉で表し、発表する。 ・注射器の目盛りは、圧す前よりも小さい数値になった。 ・空気の体積は小さくなった。 ・ピストンを強く圧すと、手ごたえが大きくなった。 ・ピストンから手をはなすと、も	・共通する結果や言葉を確認させ、「おしちぢめられる」「体積は小さくなる」「おし返す力」などの用語を短冊にして提示する。（表）	技体積がどうなるかを調べ、記録している。（ワークシート） **おしちぢめられる** **体積は小さくなる** **おし返す力**

との位置にもどった。 ・空気の体積はへった。		
4．空気の性質を確認する。 ・石鹸水のあわは小さくなった。	・見えない空気をせっけん水のあわに置き換えて様子を観察することを伝える。（理）	
5．考察・まとめをする。 ・とじこめた空気をおしたとき、空気はおしちぢめられて、空気の体積は小さくなる。 ・体積が小さくなるほどおし返す力は大きくなる。	・話型に「おしちぢめられる」「体積」「小さく」「おし返す」という言葉を使ってまとめさせる。（表） ・話型にまとめたことを、動作化しながら説明させ、学習内容を定着させる（記）	知空気の性質を理解している。（発表・ワークシート）

9．参観者の視点

・本時の目標にせまる「日本語の目標」の設定になっていたか。

・ターゲットセンテンスは適切であったか。

第４学年１組　　音楽科学習指導案

２０１６年7月１２日（火）５校時

１．題材名　　指揮で自分の思いを表そう

　教材名　　「トルコ行進曲」　「メリーさんの羊」

２．題材目標

・指揮の学習にすすんで取り組もうとしている。（音楽への関心・意欲・態度）

・自分のイメージしたことが伝わるように指揮のしかたを工夫している。（音楽表現の創意工夫）

・自分の思いや意図を「音楽のもと」を使って説明し、指揮で表現する。（音楽表現の技能）

・行進曲のリズムや２拍子の流れを感じ取って聴く。（鑑賞の能力）

３．指導にあたって

本学級の児童は、明るく活発で、歌ったり演奏したりすることが好きな児童が多い。初めて出合う曲にも、歌や演奏の活動に楽しんで取り組むことができる。しかし、身体全体を使って歌ったり、気持ちを込めて演奏したりすることに恥ずかしさを感じてしまう児童もいる。特に歌唱では、歌詞の内容を理解しイメージをしながら歌い、歌声に強弱などの変化をつけることができる児童はごくわずかである。５月に学習した「エーデルワイス」では、３拍子の拍の流れを感じながらリコーダーで演奏した。３拍子の拍の流れにのりながら演奏できている児童も多くいたが、「拍の流れ」という概念を捉えにくい児童も少なくなかった。そのような児童に対しては、身体活動を多く取り入れることで、拍の流れを体得させていきたい。

次に、気持ちを込めて歌ったり演奏したりすることが恥ずかしい児童に対しても、少人数でのグループ活動や協働学習の時間を設け、友達同士の意見交流の場を広げていく。そのためには音楽を形作っている要素（音楽のもと）である教科語彙を増やすことが必要である。そうすることで自分の思いを表現することが苦手な児童への支援につながると考えられる。

「トルコ行進曲」「メリーさんの羊」は、どちらも２拍子の曲で、児童が課題としている拍の流れと表現を比較的容易に身につけやすい教材である。「トルコ行進曲」は、特徴的な旋律やリズムの繰り返し、強弱の変化等によってトルコ軍楽隊の力強さや勇ましさが描かれている。また、だんだん遠ざかっていくようすが、だんだん音を弱くすることで表されており、指揮で表現しやすい。「メリーさんの羊」はアメリカ伝統曲で、童謡として世界中に親しまれている。８小節からなるこの楽曲は、４小節ずつの２フレーズ構成で、シンプルで歌いやすく指揮も振りやすい。「羊」という動物からさまざまな様子を想像しやすく、そのイメージも広げやすい楽曲である。

指導にあたっては、まず「トルコ行進曲」で行進をしたり指揮を振ったりしながら、身体全体で２拍子の拍の流れを感じさせる。また、だんだん遠ざかっていくようすを指揮で表現させ、「様子」と「指揮」を結びつけられるようにする。次に「メリーさんの羊」で自分の想像した羊を言葉に表し、指揮で表現できるようにする。その際、羊の大きさや行動、気持ちなどの感じを表す言葉の例を出したり「音楽のもと」を示したりして児童の語彙の獲得量を増やす。さらに「〇〇をイメージして△△な指揮をします」などの話型に当てはめさせて児童が表現しやすいように支援する。また、強弱や速度のバリエーションを提示し当てはめることで、様子から指揮を考えることが苦手な児童も、自分のイメージに合う強弱や速度を選ぶことができるようにしていきたい。指揮で表現する際にはグループ活動を取り入れ、自分のイメージした羊を伝える指揮を工夫し、児童同士での学び合いを大切にしながら表現活動を深めていきたい。本題材を通して自分の考えや思いを、身体を使って表現することで基礎的な表現の能力を身に付けさせ、生涯にわたり音楽を愛好する心を育てたい。

４．単元の授業過程（全４時間）

次	時	児童の学習内容・活動	指導上の留意点	おもな評価規準 大切な言葉
1	1	○トルコ行進曲を聴き、曲に合わせて体を動かす。 ・４分の２拍子を知る。 ・２拍子の指揮の動きをする。 ・強弱の変化や、そこから想起されるイメージを意識しながら聴いたり指揮の動きをしたりする。	・指揮者の役割について説明し、実際の指揮者の映像を見せて指揮のイメージをふくらませる。 ・２拍子の指揮の図を見ながら、リズミカルに指揮ができるよう助言する。	★「トルコ行進曲」の拍の流れや強弱の変化などを聴き取り、それらの働きが生み出すよさやおもしろさなどを感じ取りながら聴いている。【鑑賞】 **強弱、拍の流れ** ★拍の流れを感じながら、強弱の変化を指揮で表そうとしている。【技能】 **４分の２拍子、強弱、変化**
2	1	○「メリーさんの羊」に合わせて指揮をする。 ○自分のイメージする「メリーさんの羊」をワークシートに書く。	・いろいろな「メリーさんの羊」を言葉にできるよう、音楽の感じを表す言葉などの例を提示する。	★「メリーさんの羊」をどのように指揮で表すかについて自分の考えや願い、意図を持っている。【関心】 **強弱（強く、弱く、だんだん強く、だんだん弱く）** **速度（速く、遅く、だんだん速く、だんだん遅く）**
	2（本時）	○自分のイメージした「メリーさんの羊」の指揮をグループで深め合う。 ・それぞれのイメージする「メリーさんの羊」を指揮で表現し、イメージが伝わる指揮のしかたを考える。 ○全員で共有する。	・強弱や速度以外に、息の吸い方や顔の表情などでも伝えられることを助言する。 ・指揮をする児童と歌う児童がお互いに意見を出し合えるよう声かけをする。	★グループ活動に主体的に取り組み、自分の考えや思いを伝えようとしている。【関心】 **○○な羊をイメージして、△△なしきをしました。ポイントは□□です。** ★自分のイメージした「メリーさんの羊」が伝わるように指揮を工夫している【創意工夫】 ★自分のイメージした「メリーさんの羊」を指揮で表現することができている。【技能】 **強弱、速度**
	3	○一人が指揮をし、全員がその指揮に合わせて「メリーさんの羊」を歌う。	・指揮をする児童のイメージしたことを大切にし、歌う児童にしっかり受け止めて表現するよう促す。	★自分のイメージしたことが伝わるように指揮をしたり、指揮を見ながら相手の想いを受け止め表現しようとしたりしている。【技能】 **強弱、速度**

５．本時の目標（第２次　第２時）

・曲に対する自分の思いを、言葉や指揮で表現することができる。

６．日本語の目標

・自分のイメージした羊を、指揮で表現することができる。

・「音楽のもと」・「感じを表す言葉」を使うことができる。

「音楽のもと」・・・強弱、速度　　「感じを表す言葉」・・・別紙参照

ターゲットセンテンス

・この羊はどんな指揮をしたら伝わるかな。　　・強弱や速度の変化に気付いたかな

８．本時の展開

学習活動	指導上の留意点・教師の支援	大切な言葉・評価規準
１．前時の学習を想起する。 ・指揮のはじめ方と終わり方を確認する。 ・「メリーさんの羊」をいろいろな強弱や速度で指揮をしたり歌ったりする。	・はじめ方として、注目させたり、「１、２」の「２」で息を吸ったりすることを提示する。（記憶支援） ・強弱や速度を伝える指揮を練習し、自分のイメージした羊を伝える指揮に生かせるようにする。（理解支援）	関前時の学習を思いだし、強弱や速度に変化をつけて指揮をしたり歌ったりしようとしている。 **４分の２拍子、強弱、速度**
自分のイメージした羊を伝える指揮を工夫しよう		
２．グループで話し合う。 ・指揮をする児童と歌う児童が、指揮について良かったところと伝わりにくかったところを出し合う。	・自分のイメージした羊をグループで交流させる。（記憶支援） ・自分の思いや意図をスムーズに説明できるようにするために、ワークシートに話型を明示する。（表現支援） ・強弱や速度以外にも、息の吸い方や表情などで思いを伝えられることを助言する。（情意支援） ・イメージした羊が指揮で伝わったところと伝わらなかったところを意見交流させ、ワークシートにその部分を青と赤で示し視覚的にわかりやすくする。（理解支援）	関積極的にグループ活動に取り組み、指揮をしたり自分の意見を言おうとしたりしている。 **強弱、速度** 創・技自分のイメージしたことが伝わるように工夫したり、指揮をしたりすることができる。
３．グループで話し合ったことを全体で共有する。 ・一人の指揮に合わせてグループ内の他の児童が歌う。 ・イメージしたことが伝わるような指揮にするためにさらに全体で深めていく	・強弱や速度を拡大楽譜に書き込み、指揮を深め合う手立てとする。 ・指揮をする児童が改善したところを伝えられるよう助言する。 ・指揮をした児童のよかったところを発表させ、互いに認め合うようにし、上手く表現できなかった児童にも次につながる言葉がけをする。（情意支援）	鑑友達のよかったところを「音楽のもと」を使って発表することができる。 **強弱、速度**
４．本時のふり返りをする。 ・相手に伝わるように指揮をしたり、演奏をしたりした感想を述べる。	・本時のまとめをしながら、これからの表現活動につながる言葉がけをする。（情意支援）	

音楽の感じを表す言葉

明るい　にぎやかな　堂々とした　はずんで　うきうきする　元気な

はなやかな　のどかな　ゆったりとした　しずかな　さみしい

ぶきみな　はげしい　おこっている　力強い　せっかちな　走っている

ひっそりとした　早歩きの　歩いている　パワフルな　生き生きした

たのしい　やさしい　いそがしそうな　わくわくする　おちついた　悲しい

第６学年２組　　体育科学習指導案

２０１６年１１月２９日（火）４校時

１．　単元名　安定した抱え込み跳びをしよう　（B 器械運動　ウ 跳び箱運動）

２．　単元目標

〇基本的な支持跳び越し技を安定してできるようにするとともに、その発展技をできるようにする。（技能）

〇運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。（態度）

〇自己の能力に適した課題を知り、その課題に応じた練習の場や段階を選ぶことができる。また、**自分が取り組む技を高めるポイントを知り、技ができるようにするための身体の使い方を工夫し、振り返ることができる。**（思考・判断）

【評価規準】

観点別学習状況の評価規準			
関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識理解
技ができたり、高めたりする楽しさや喜びに触れ、約束を守り、助け合って運動しようとしたり、運動する場や器械・器具の安全に気を配ろうとしたりしている。	課題解決の仕方を知り、自分の課題に合った練習の場や方法を選んでいる。 自分が取り組む技のポイントを知り、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。	自分の力に合った安定した基本的な切り返し系の技や回転系の技ができる。 自分の力に合った切り返し系や回転系の発展技ができる。	保健（運動での評価は中学校から）

３．　指導にあたって

本学級の児童は、明るく活発で、比較的運動能力の高い児童が多い。１学期に行ったマット運動では、倒立前転、前方倒立回転など倒立系や回転系の発展技を補助なしで成功させ、ミニ先生になって友だちにアドバイスができる児童もいた。しかし、倒立系の運動において、自分の体重を両手で支持できにくい児童も３人おり、すべての児童が安定した壁倒立や補助倒立ができるに至っていない。両手で身体を支えきれないため、斜めに回ってしまう前転をする児童、後転運動では、両手を突き放して回ることができない児童が少数いた。跳び箱運動については、以前から準備運動で馬跳びやカエル跳び、カエルの足うちなどをさせていたため、馬跳びができない児童はいない。つまり基本的な支持跳び越しはできている。しかし、カエル跳びについては、抱え込み跳び運動を成功させるために必要になってくる運動であるが、両手を開いて着手した場所に両足をつく運動ができていない児童が３人いた。両手を着

かずに前のめりになってしまったり、両手を突き放せずに両足を両手の方へもっていくことができなかったりしていた。まずは、マットの奥に着手して跳び越す運動（写真１）を行い、その後セーフティーマットと同じ高さに重ねたマットを跳び越す運動（写真２）に続けて、スモールステップでかかえ込み跳び運動に移行できるような手立てが必要であった。セーフティーマットを使うと怪我の恐れがないため、児童は積極的に練習を行うことができた。

【写真１】

【写真２】

この２つの運動を行ってもマットの幅を跳び越すには至らない児童が数名いる。跳び越すためには、両手の突き放しがポイントとなってくる。単元計画第１時で行った跳び箱運動の「開脚跳び」でも、跳び箱を跳び越す際に、両手の突き放しという技能ポイントがある。以下は開脚跳び５段、６段のチェックである。

事前の開脚跳びチェック		
第６学年２組	成功者	成功率
５段開脚跳び	３９人中３３人成功	８４．６％
６段開脚跳び	３９人中３２人成功	８２．１％

開脚跳びでは、腕支持からの体重移動が不可欠である。また安定した開脚跳びをするためには、跳び越す際の両手の突き放しが大切である。成功していない児童のほとんどが腕支持の体重移動や自分の体重を手や腕で支えることができていなかった。開脚跳びとかかえ込み跳びの２つの運動で両手の突き放しを指導し、多くの児童が技能を習得できるようにしていきたい。

本単元の第５学年及び第６学年の器械運動は、「マット運動」「鉄棒運動」「跳び箱運動」で構成されてり、日常生活では通常行われない動きを含んだ運動を行うことが特徴である。これらの運動は、技を身につけたり、新たな技に挑戦したりして、できた喜びや楽しさを感じることができる運動である。加えて友だちとアドバイスし合ったり、成功の喜びを共に感じ合ったりできる達成型の運動でもある。

跳び箱運動については、第１学年及び第２学年の「B 器械・器具を使っての運動遊び　エ 跳び箱を使った運動遊び」の跳び乗りや跳び下り、馬跳びやタイヤ跳び、第３学年及び第４学年「B 器械運動　ウ 跳び箱運動」の基本的な支持跳び越し技に取り組み、自分の力に合った技ができるようにするとともに、その発展技に挑戦していくことが目標となる。また、練習していく中で、自分の課題を明確にしたり、課題解決の方法や場を選んだりする力を高めることもできる。また、友だち同士でアドバイスをし合ったり、励まし合ったりする気持ちや準備や片付けの際も安全に気を配ろうとする態度を養うこともできる学習である。

本単元では、基本的な支持跳び越し技（切り返し系の安定した開脚跳び、かかえ込み跳び、

回転系の大きな台上前転）に取り組み、自己の能力に適した技ができるようにするとともに、成功した喜びや楽しさを味わわせ、友だちと協力して運動の質的向上を目指していくことをねらいとしている。

指導に当たっては、児童が跳び箱運動に楽しく技術を高めていけるように、恐怖心を取り除くことができるような場づくりを設定することが必要である。特にかかえ込み跳びは、ひざを胸に引きつけて跳ぶため、跳び箱の角で膝や脛を打つのではないかという恐怖心が開脚跳びよりも増すものと考えられる。セーフティーマットを使用して安全に配慮し、児童が「これならできるかもしれない」という自信や勇気が湧いてくる場づくりを設定したい。そして、難易度を少しずつ上げたスモールステップの場を作り、児童が個々の能力に合った練習方法を選び、単元の中でできることが少しでも増えていけるような学習を展開していく。マット運動は児童同士の補助でも安全に技を習得することができるが、跳び箱運動では、教師の補助ではないと安全確保が難しい。今回は、６年生ということもあり女子児童に配慮し、T1T2方式をとり、学級担任に女子児童の補助を依頼した。また自分の動きは感覚でしか分からないため、見ている児童がお互いにアドバイスをし合い、失敗を笑わずに助け合って学習を進めていけるように約束を守ることも大切にしたい。

この研究の特徴として、「自分の身体の動きを言語化する」という目標を年間通じて立てている。本校研究の教科指導方日本語指導の観点を取り入れ、授業終了後に大事な言葉（上達ワード）を使い、例えば「両手を跳び箱の手前に着いたときは、開脚跳びはできなかったが、跳び箱の奥に着いたときは、跳び越すことができた」というように、自分の身体の動きを言葉で表す力を付けさせたい。技を高めるポイントをより意識することで、細かい身体の使い方が理解でき、運動技能の向上にもつながると考えられる。そこで、別紙１のようなワークシートを作成し、１学期より「ことばの力育成」を考えた上での授業を続けてきた。また、書く力や書く量に偏りはあるが、意識するポイント使って書ける児童も増えてきている。技能と思考の一体化を目指した授業を展開していきたい。

最後に、体育の学習として運動技能が発達段階に応じて向上していかなければならないのは当然ではあるが、技能にとどまることなく、内容として、「態度」という情意にかかわる学習や「知識、思考、判断」という認識的な学習も重視される。跳び箱運動のポイントである着手や着地の方法や両手の突き放し、肘や膝の曲げ伸ばしなど、自分自身の身体の動きを知り、言語化する学習を取り入れることにより、運動生理学などの生涯スポーツへの興味を持たせ、キャリア教育の一環としての体育学習を進めていきたい。

対象の外国人児童について

【ペルー国籍Ａ児】
小学校入学時から５年時まで週１，２時間日本語指導教室にて取り出し指導を行っていた。５年時になると計算がかなり速く得意になり、算数科の取り出しは無くなったが、文章能力が思わしくなかったため、週に１回程度、日記や感想を書く指導を取り出しで行っていた。日本語能力も高く、教科の理解力もある。家庭では、母親の考えで母国語であるスペイン語も練習おり、会話はスペイン語で行われている。本人によるとスペイン語で考え、日本語に変換して学校生活を送っているようである。体育科においては、運動能力も高いが、すぐに課題を終わらせようとする多少雑な部分があるため、振り返りの文章を書く場面では丁寧に指導していきたい。

【ペルー国籍Ｂ児】
小学校入学時から５年時まで週１，２時間日本語指導教室にて取り出し指導を行っていた。雨の日や月曜日など保護者の都合や本人の気持ちの問題で欠席が多い。年間６０日以上欠席した年もある。不登校傾向にあり、日頃から声掛けが必要な児童である。教科の理解力はあるが、欠席が続くため教科の積み重ねができていない。学習がどんどん遅れている状況である。算数の少人数担当や学級担任が関わって学習を教えているが、欠席が多いことが原因でなかなか解消されていない。体育科においては身体が大きいため、運動に対して苦手意識がある。器械運動は特に苦手である。自尊心がやや低くなっている。できることを増やして、やる気を持たせて取り組ませたい。

単元の授業計画　全１２時間

次	時	児童の学習活動	指導上の留意点	大事な言葉　主な評価規準
1	1	・オリエンテーション	・跳び箱運動ではケガをすることが多いため、安全面がもっと大事であることを理解させる。 ・易しい場や条件のもとで取り組ませる。 ・用具・器具を安全に使わせる。	関技を高めたり、組み合わせたりする楽しさや喜びにふれることができるよう、進んで運動に取り組もうとしている。 **・助走→ふみきり→空中姿勢→着地** **・両足でふみきる** **・両手を跳び箱の奥に着手する** **・ひざをのばす** **・腰を上げる** **・ひざを曲げて着地する**
2	1	・安定した開脚跳びをする。 【開脚跳び】	・易しい場や条件のもとで取り組ませる。 ・教師の補助で安全に技を習得させていく。	関技を高める楽しさや喜びに触れることができるよう、跳び箱運動に進んで取り組もうとしている。 考課題解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の場や方法を選んでいる。 技自分の力に合った安定した開脚跳びができる。 **・両足でふみきる** **・両手を跳び箱の奥に着手する** **・ひざをのばす** **・腰を上げる** **・ひざを曲げて着地する** **・第一空間をつくる。** **・両手を突き放す**
	1	・安定した大きな開脚跳びをする。 【大きな開脚跳び】		

3	3 本時 (2/3)	・安定したかかえ込み跳びをする。 【かかえ込み跳び】	・易しい場や条件のもとで取り組ませる。 ・スモールステップで自分の力に合った場を選ばせ、安全用具を使用して恐怖心を緩和させる。 ・どの大事な言葉を意識するとできたのか、どこまでできたのかを振り返えらせる。	考自分が取り組む技のポイントを知り、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。 技自分の力に合った安定したかかえ込み跳びができる。 **・両手の間に両足を入れる** **・ひざを胸にひきつける** **・腰を高くする** **・両手を突き放す**
4	3	・安定した回転技に挑戦する。 【台上前転】	・易しい場や条件のもとで取り組ませる。 ・スモールステップで自分の力に合った場を選ばせ、安全用具を使用して恐怖心を緩和させる。	関技を高めたり、組み合わせたりする楽しさや喜びにふれることができるよう、進んで運動に取り組もうとしている。 考自分が取り組む技のポイントを知り、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。 技自分の力に合った回転系の技ができる。 **・両手を跳び箱の手前につく** **・強く踏み切り、腰を高く上げて膝を伸ばす** **・首筋を跳び箱の手前につく（頭を両手の間に入れる）** **・スピードをコントロールしながら回る**
5	3	回転系の発展技に挑戦する。 【頭はね跳び】 【首はね跳び】	・易しい場や条件のもとで取り組ませる。 ・恐怖心を緩和させるような安全用具を使用させて、自分の力に合った運動をさせる。 ・無理はしないよう安全に取り組ませる。	関技を高めたり、組み合わせたりする楽しさや喜びにふれることができるよう、進んで運動に取り組もうとしている。 考自分が取り組む技のポイントを知り、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。 技自分の力に合った回転系の発展技ができる。 **・体を反らす。** **・「く」の字の状態でためて、足をふり出す。** **・跳ねと同時に腕を伸ばして突き放す。**

４．　本時の目標（第２次　第２時）

・安定したかかえ込み跳びができる。（技能）

・課題解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の方法や場を選んでいる。

（思考・判断）

５．　日本語の目標

・自分の身体の動きを大事な言葉（上達ワード）を使って言語化することができる。

（イ・ウの目標）

ターゲットセンテンス

・（大事な言葉）に気をつけるとどうなりましたか。
・（大事な言葉）をしないとどうなりますか。

大事な言葉（上達ワード）

両手の間に両足を入れる　　両足でふみきる　　腰を高くする　ひざをむねにひきつける
目線は前にする　　両手を突き放す　　ひざを曲げて着地する

６．　本時の展開

学習活動	教師の支援	大切な言葉・評価基準
１．めあてを立てる（５分） ・かかえ込み跳びの意識ポイントをおさらいする ・ワークシートに書く	・かかえ込み跳びのポイントに気を付けられるように、繰り返し確認する。（記憶支援） ・大事な言葉と写真をホワイトボードに張り、動作と言葉が分かるような視覚的な掲示をする。（理解支援）	関本時の学習課題に興味を持って取り組もうとしている。（発表・ワークシート）
２．準備運動をする（４分） ・体の各部分をほぐす	・ケガの防止を第一に考えるように体の各部分をしっかりほぐすよう声掛けをする。（情意支援）	
３．感覚つくりの運動をする（４分） ・柔軟・馬跳び・カエル跳び	・楽しい雰囲気で主運動への助走運動ができるよう声掛けをする。（情意支援）	
４．場の準備をする（５分） ・使用する用具を友だちと協力して準備する	・用具の配置図をホワイトボードに書いておく。（理解支援）	
５．自分に合った場でかかえ込み跳び、及びかかえ込みに跳びにつながる運動を練習する（１５分）	・できているところは褒めたり、必要なところは補助したり、危険なところは直させたりする。（情意支援） ・仲間同士で補助をし合って、励ましていることに着目させる。（情意支援）	関技を高めたり、組み合わせたりする楽しさや喜びにふれることができるよう、進んで運動に取り組んでいる。 考課題解決の仕方を知るとともに、自分の課題に合った練習の方法や場を選んでい

	・できなかった児童には、できているところまでを褒め、次につながるような声掛けをする。（情意支援） ・映像を見せながら、意識するポイントを分かりやすく説明する。（理解支援）	る。 技自分の力に合った安定したかかえ込み跳びができる。（教師チェック・ワークシート） **・ひざをむねにひきつける** **・腰を高く上げる** **・両手をつきはなす**
６．自分の動きを確認する（３分）	・上達が見られた児童の実演を見せながら意識ポイントを説明する。（理解支援）	
７．整理運動をする（２分）	・使った体の部分をしっかり伸ばすことが大切であることを伝える。	
８．片付け（２分）	・友だちと協力して後片付けをさせる。	
９．振り返り（５分）	・大事な言葉を意識するとどんな動きになるのか、大事な言葉の動きをしないとどうなるのかを考えさせ、自分の体の動きを言語化させる。（理解支援・記憶支援・表現支援）	考自分の身体の動きを言語化し、できるようになったことを絵や文章に表すことができる。（ワークシート・発表）

７．　参観者の視点

〇大事な言葉（上達ワード）使って、自分の動きを文章で表すことができているか。

〇３つの支援は、児童の動きを変化させる手立てになっていたか。